

自立した主権者 をめざして

▶ ▶ ▶ Vol.39 不寛容のパラドックス

KEYPOINT

- あなたは社会的な課題について日ごろ考えていますか？
- また、考えていることについてどんな活動をしていますか？

SUMMARY

寛容な社会を目指そうとよく言われます。他者にやさしく、思いやりを持った行動は自分の満足にもつながりますが、なんでも許してよいわけではない、ということも事実です。

「不寛容な社会」は何故なくならないのか、寛容な社会とは何なのか。答えは簡単に出ません。誰かが決めてくれるのを待つのではなく、皆で一緒に考え続けることが大切です。

お知らせ

(1月1日発行)1面論文について、構成や流れや受け止め方等をコメントする場をYouTubeチャンネルで配信しています。毎月配信しますのでニュースと併せてご視聴ください。



世界で広がる「不寛容な社会」

いま世界中で「不寛容」の嵐が吹き荒れています。今なお続くガザの紛争は、イスラエルとパレスチナの凄惨な対立の歴史が原因です。ユダヤ人が2000年の長い歴史の中で世界に離散し、迫害を受けてきた悲劇と、イスラエルの建国で故郷を追われたという、パレスチナ人の悲劇。お互いの立場、主張は相いれることがありません。パレスチナに暫定自治区を設置して、いずれはイスラエル、パレスチナの双方が共存することを目指そうとする、オスロ合意をはじめ、様々な和平交渉が試みられてきましたが、アメリカやアラブ諸国などの思惑もいりまじり、ハマスがガザ地区からイスラエルに向けてロケット弾を撃ち、イスラエルが報復として空爆することがくりかえされています。

日本で言えば、2023年の「世界幸福度ランキング」で日本の順位は47位と、数年前の60位台に比べて上昇しているのですが、「一人あたりの国内総生産」、「社会的支援」、「出生時の平均健康寿命」ファクターでは上位の国々とほとんど変わらないのに、「社会の寛容さ」というファクターでは、0.009と、ほぼ無いに等しい結果になっ

ているのです。この幸福度の調査がおもしろいところは、幸せの理由を具体的に説明する6つのファクター（「一人あたりの国内総生産」、「社会的支援」、「出生時の平均健康寿命」、「人生の選択をする自由」、「他者への寛大さ」、「公職者が汚職/墮落しているという国民の認識」）が日本より少ない国でも、別の世論調査で見ると、総合的な幸福度のスコアは日本よりずっと高い場合があるということです。日本は他国に比べて幸せになる社会的な条件はけっこう揃っているのに、なぜか幸せを感じていない、その理由の一つに先述の「社会の寛容さ」が最低レベルであるというスコアが関係しているように思われます。

私達を感じる幸福度と寛容性

今日本では週刊誌のスcoopで不倫が発覚したタレントが世間から大バッシングを浴びることをはじめ、SNSやブログなどではちょっとした一言がきっかけで炎上するということが頻繁に起っています。もちろん、不倫は倫理や道徳から外れた行為なので、当事者が家族や関係者に責められ、謝罪をするということは当然ですが、何も関係ないテレビやパソコン画面の前の人たちが、辛辣に批判し、社会的に再起不能にまで陥れるのは少し行き過ぎの気がします。他にも、小中学校の運動会の放送や除夜の鐘の音を「騒音」と捉えることや、香水や衣服用の洗剤の「ニオイ」についても徹底的に排除しようという人も少なくないのです。

2016年に「不寛容社会」という番組がNHKで放映されましたが、「不寛容」とは「心が狭く、人の言動を受け入れないこと。誰もが皆「寛容な社会が望ましい」と口にします。

では、「寛容な社会」とは何でしょう。不倫が「不」ではなくなり、日常的に大音量が許され、他を気遣うことなく二オイをまき散らすことを赦すのが寛容でしょうか。寛容とは「どんなことでも受け入れる」ことです。簡単に一言でいえば「何をしてでも許しますよ」という意味になってしまいます。カール・ポパーは1945年に「もし社会が無制限に寛容であるならば、その社会は最終的には不寛容な人々によって寛容性が奪われるか、寛容性は破壊される」という、「寛容のパラドックス」と呼ばれる理論を提唱しました。簡単に言うと、何でも受け入れたら、結局何も受け入れられなくなって社会は壊れてしまうだろうという理屈です。最終的にポパーは、「寛容な社会を維持するためには、寛容な社会は不寛容に不寛容であらねばならない」という一見矛盾した結論に達しました。不寛容な社会の中で幸せを見いだせない私たちは、いったいどうすれば良いのでしょうか。

価値観を受け入れる基準をどうつくるのか

当然、「なんでも許す」ための最低限のルールは必要です。人を殺してはいけない、物を盗んではいけないといった「法律」を破る事には寛容であってはけません。しかし、人との関りにおいて「こうあるべき」という自分の価値観にこだわ

りすぎないということが大事なのではないでしょうか。他人の価値観を受け入れることは自分を否定することではないのです。勝ち負けの二項対立で物事を考えず、自分の中の許容ゾーンを少しだけ広げる、他者の意識を自分の内側に少し受け入れることから、寛容は生まれてきます。

自分が生きてると同じように他の人も生きています。自分の幸せだけを追求しても最終的には幸せになれません。自分が他者を排除すれば、結局、他者から排除されるのです。だからこそ、自分の中に判断の基準をもたなければ、世論に簡単に流されてしまいます。私たちが持つべき判断基準を決めるには、政治、経済、教育、自然環境などの社会問題について自分で考えてみるのがはじめの一歩になります。何を許して何を許さないのか。一人で、そしてみんな「寛容さ」について考えていきましょう。

〈機関紙「日本再生」No.536の内容〉

機関紙「日本再生」No.536 2024/01/01 発行
歴史的転換期—危機の時代と下り坂の時代に、民主主義を鍛える●3面/コラム/一灯照隅●4-5面/インタビュー/たちかわの未来図/酒井大史・立川市長●5-10面/困む会/これからの時代にふさわしい政治/小川淳也・衆議院議員●11-16面/京都望年会/持続可能な交通まちづくり/川勝健志・京都府立大学教授●17-19面/インタビュー/政治主導と官僚制の行方/嶋田博子・京都大学教授

※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に
考えてほしいこと

- ・あなたが「許せない」ことはなんですか？
- ・寛容な社会とはどんな社会だと思いますか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。